

數寄屋町

霰酒

讃岐や兵助

下横町

山川酒

天満や

〔江戸總鹿子^五〕下り酒。

中橋廣小路

吳服町壹丁目

貳丁目

瀬戸物町壹丁目

〔嬉遊笑覽^{十上}〕下り酒、昔は江戸にて多く酒を造りて、下り酒はなかりし、事跡合考に、南川語て云、津の國鴻池の酒屋勝屋三郎右衛門と云もの酒二斗づ、入る桶二つを一荷として、其上に草鞋數足置きたるを擔て、江戸に下り、大名の家々に至りて、一升を錢二百文づ、に賣たり、其頃いまだ龜酒のみにて、これが酒の如き美酒なき故ばいとりがちに買はやらかし頻りに上下して夥しく利を得たり、其頃は米は下直なり、木錢は十二文ほどしたる故、鴻池より一上下錢二百五六十文にて仕廻たり、肩の上ばかりにてはかゆかざる故、その一荷四斗の酒を一樽として、二樽を馬一駄とて、數十駄づ、持下りて、勝屋賣たり、依之末代に至りて、酒の價を極るとき、十駄金子、何十兩と立るもの、甘樽酒八石の積りなり、追日酒うれる故、馬の背にても及びがたく、終に東海を何十萬樽と云に至りて、船につみ入津する事、今日盛りなりと云り、此いつ頃のことにか、江戸鹿子に、下り酒や、中橋廣小路、吳服町一丁目、二丁目、せと物町一丁目と見えたり、

〔江戸名物詩^{初編}〕内田屋酒店 外神田昌平橋外

昌平橋外内田前德利如山酒爲泉、孔子門人多上戸、瓢箪携至是顏淵、

〔我衣〕前々ヨリ酒樽割醬油樽割トテ、一ト樽賣ノ代物割ヲ以テ、一合二合ノ小賣ヲシ、或ハ上酒ヨリ次酒、段々價下直ニ書付ヲ廻シ、所々ヨリ出ルトイヘドモ、當分計ニテ末ハ外ノ酒店ニカワル事ナシ、爰ニ元文元年、鎌倉河岸ニ豊島屋ト云酒屋、見世ヲ大ニシテ、外々ヨリ格別下直ニ賣タリ、毎日空樽十廿ヲ小賣ニテ、明ルホドニ、酒ハ元直段ニテ樽ヲモフケニシケリ、其頃ハ樽一匁ヨリ